◆一九八四年一月二十三日

希望なき時代。

相変わらず勝者を妬み敗者を笑うことでしか自分自身を守れぬ救い難い人々は、アルカという小世界を舞台にして行われる、美しき人造人間同士の娯楽化された限定戦争――所謂『学園大戦ヴァルキリーズ』――だけを唯一の癒しとしていた。

狼の世。まさに羊の皮を被った、狼達の世である。

◆

「もう……」

アルカ西部の米国フロントにある、同地の『イスラエルの地』(エレッツ・イスラエル)こと北京農園。[注2]

「そこまでしなくてもいいじゃないの……」[注1]

レア・アンシェルはその司令部たるバシール・ジェマイエル国際空港の一室で苦言を呈していた。

「目玉が飛び出してるわよ」

茶色の髪と濃い緋色の双眸を持つＧＲＯＭ[注3]にしてラマトカル[最高司令官]が今見ているのは、昨年九月十三日の映像。テウルギスト[降霊術師]――ノエル・フォルテンマイヤーがサブラ・グリンゴールドを背後から貫いているそれだ。前者は全身が血まみれだが後者は更に酷く、手で腹をぶち抜かれているだけでなく、顔面左側からは視神経だけで繋がった眼球をぶら下げている有様。

「テウルギストはわた……グリンゴールド中佐を嫌っているようですね」

映像はノエルが荒っぽく腕を引き抜くや否や、サブラが力なく倒れ込む模様で終わる。直後レアはため息と共にモニターを切ったが、同時並行で他人事めいた響きを発する者がいた。

「グリ……いえ、私はこの映像とは無関係です。くれぐれもお忘れなきよう」

当のサブラ・グリンゴールドである。

『イスラエルで生まれた、生粋のイスラエル人』

それを名に冠する彼女は、北京農園の最精鋭として学園大戦ヴァルキリーズ[注4]のあらゆる敵勢力を蹴散らしてきたＧＲＯＭだ。百七十センチ超えの長身と、赤いヘアバンドとの対比が印象的なセミロングの黒い髪。そして度が入っているのか入っていないのかわからぬ眼鏡の奥には、光の角度によっては薄茶にさえ見える紫色の瞳。ただ、右首筋に個体識別用のバーコードは見受けられない。

「私はさすらいのセキュリティ・コンサルタント（ジャーニーマン）であるＳ中佐。サブラ・グリンゴールド中佐とは、姉妹同然の間柄にある親友同士に過ぎません」

けれどもレアと机を挟んで向き合うサブラは、彼女と一切目を合わせず戯言を抜かし続ける。こいつは誰がどう見てもサブラ・グリンゴールドだが、しばしば機密保持という名目で名乗る『Ｓ中佐』を頑なに貫き通そうとしていた。自分は冷酷な歯車ではなく、偶然拾った書類を中国語と勘違いしたせいで、この組織を

北京農園という名前にしてしまった愛すべき存在なのだと……。

「アンタが私のために動いてくれたのは知ってる。だけど、あんなことは二度としないで」

しかしレアは一切茶番に付き合わない。マーレブランケ[注5]の台頭やバリカドイ[注6]の支援に追われて先延ばしになっていたが、ラマトカルはサブラが昨年の九月一日、前者を叩くべくアゴネシア[注7]に許可なく赴いたことを許してはいなかった。

「レアさん……怒っていますか？」

「凄く怒ってる」

揃ってイスラエル国防軍の兵士と同じオリーブドラブの軍服――サブラだけはその左肩部と右胸及び左胸に、本国で訓練課程を修了して得たアトリット基地[注8]のアームシールドとツァンハニムの証たるベレー帽、空挺部隊並びに海軍特殊部隊シャイエテット13の徽章が見受けられる――を纏う二人は単なる上官と部下ではない。同性同士ながら肉体的・精神的に深く繋がり合う間柄。

「確かに私は、マーレブランケについての懸念は口にした。でも『そうしろ』と言った記憶はない。一言も言ってないの」
しかし忖度とも取れるサブラの行動は、深い関係に亀裂を生じさせるものだとレアは認識していた。故に彼女は怒っている。
「北京農園という、道徳的にも国際的にも正当化された組織の歯車として……」
「そういうのいいから」
「――ッ」
ぎこちない動作でレアを見たサブラは、彼女の双眸が潤んでいることに気付く。
「レアさ……」
「そういうの……いいから……本当に」
続く言葉もまた震えていた。話せば長くなる理由を持つサブラはアゴネシアで殺された後、これまた話せば長くなる理由で蘇った。しかしレアは、それを結果オーライでは済ませられない。済ませられないのだ。

「私には感情がありません。でもレアさんを守ろうとして、その結果レアさんを深く傷付けてしまったことは……良くないことだと思います」

マーレブランケが動き出したことを知ったサブラは『大切な存在（レア・アンシェル）の脅威となる人殺しが復活した』と認識し、領空侵犯を行った挙句アゴネシアの孤立地帯（ケッセル）まで単身殴り込んだ次第。どうしてあんなことをしてしまったのか……正直自分でもよくわかっていない。

「本当にごめんなさい」

それでもサブラは謝罪した。論理的な説明はできないが、自分は謝らなければならないと彼女は思っていた。そうしないと、自分にとって必要な何かを失うと感じた故。

「アゴネシアの孤立地帯（ケッセル）で殺害された私が、それでも再生できたのは……きっと『北京農園をまだ防衛しなければならない』と思ったからでしょう」

だが返答はなく、レアは静かに立ち上がって窓外――六人乗りの特殊改造車（バタシット）が

行き交い、昨年六月十一日（コールド・ギア）の戦闘で撃破されたPT-76水陸両用戦車のすぐ横を通過していく――を見た。

「何が『感情を持たない歯車』だか……笑わせないで。でも、戻ってきてくれて本当に良かった」

そしてレアは、昨年十一月二十一日（バリカディ）のようにブラインドを閉めてからサブラに向き直る。

「アンタがいなくなったら、私の生きてる理由もなくなっちゃうから……」

プレトリアン[注9]に拒絶され、ハブナッツ（持たざる者）と侮蔑されながらも血文字の三文小説をひたすら紡ぎ続けるしかなかったレア。彼女はとある理由から『生きられる限り生きる』という罰を自らに課している。それはサブラに対するせめてもの贖罪。

「だからサブラ……」

レアは荒っぽい動作で軍服の一番上のボタンを外す。十二年前（コールド・ギア）の戦闘中、敵に見付かるのを防ぐためバーコードごと皮膚を引き剥がした傷が露になる。

「私が生きてる理由……思い出させて」
そして最後に襟元を広げ、一秒でも早く繋がりたいとサブラに訴えた。

注1　世界の最果てに存在する地。学園大戦ヴァルキリーズの舞台となる場所で世界各国を模したフロントが各地に存在している。
注2　イスラエルフロントが撤退した後も、米国フロント内に軍事支援団（MAF）として残っている軍閥。リーダーはレア・アンシェル。
注3　ヴァルキリーの中から極めて低い確率で誕生する少女達。各種ローブ及びエグゾスケルトン、フライトユニット等を用いた戦闘が可能。
注4　第二次世界大戦後、世界を事実上支配するようになった多国籍企業であるグレン&グレンダ社が考案した娯楽戦争。
注5　二代目マリア・パステルナークが率いる米国フロントの軍事支援団（MAF）。
注6　ソ連フロントのサークル。

注７　東南アジアのどこかにあるとされる国。
注８　イスラエル北部にある海軍基地。
注９　マナ・エネルギーとの触媒の役割を果たす寄生虫。ＧＲＯＭは一部を除く全員が体内に潜ませている。

◆

「こちらを」
先に軍服を着直したサブラは、つい先程までお互いの感情を確かめ合っていた相手に報告書を差し出す。
「これは……？」
トップスを羽織った以外はまだ全裸――ソファの上で行われた秘め事の名残をまだ残しているレア。そんな彼女は怪訝な表情でそれを受け取った。

「気持ちのいい話じゃないわね」

そして数枚捲るや否や、右首筋の傷が疼くのを感じる。恋仲との情交で生じた心地良い気怠さも一瞬で吹き飛んでしまった。

『奴らは二十四時間で全てを終わらせる気だ』

報告書の内容は要約するとこれだ。アルカ各地で活動するモサド[注1]の工作員達はキャロライン兵団（傭兵部隊）とバリカドイによるバシール・ジェマイエル国際空港の襲撃を警告していた。

「そんなこと言われてもね……」

レアは困惑した。ソ連フロントの軍事支援団（MAF）であるキャロライン兵団（傭兵部隊）は戦力を即時展開可能な能力によって、学園大戦における『個人事業主』の最も優秀かつ悪名高い見本となった連中だ。劣勢に立たされたフロントが判定負けを呑み込む条件として、契約した勢力との関係解消を求めるような強者達である。

「襲われる理由がないわよ？」

ただマーレブランケと違って、北京農園とキャロライン兵団（傭兵部隊）には悪い意味での敵対関係が存在していない。それどころか、昨年十一月には揃ってバリカドイを支援しているのだ。

「キャロライン・ダークホーム……」

レアは一旦報告書を置くと背中側を見た。そこには、スティンガーミサイル[注2]の発射機が飾られている。昨年マーレブランケとの戦いに際し、これを供与されたバリカドイが感謝の印としてプレゼントしてくれたものだ。

「星も輝かぬ世界を支配する女……か」

今もなお続くマーレブランケとバリカドイの対立において、北京農園は表向き中立を保っている。だが後者のヴァルキリーが、自分達から提供された米国製の兵器なり不良在庫（ソ連製兵器）を使っているのは公然の秘密。今月だってコンプレッサー用のタイヤと偽ってファントム（F-4）用のそれを送っているし、百発近いクラスター爆弾の売買契約だって締結間近なのだ。更には優秀なベルギー人メカニックも引き続き

派遣中――だから感謝されることはあっても、恨まれる理由はどこにもない。
「確かにバリカドイは最近、マーレブランケ傭兵部隊との戦闘で負った損害を急ピッチで補填しています。それは恐らく、キャロライン兵団の入れ知恵かと」
「十中八九そうでしょうけど……」
懐疑的ながらも、レアはモサドの警告を一笑に付すことはなかった。サブラが指摘した通り不穏な動きがない訳ではないからだ。むしろ、マーレブランケとの戦闘を通してキャロラインと繋がったバリカドイには、以前のような御し易さはないと考えた方がいい。
「エチオピアから買い物もしてるしね」
少し前、バリカドイはエチオピア軍が売りに出したF‐5E戦闘機――米国の支援打ち切りで予備部品が底を尽き、離陸すらままならなくなった十七機――を独自のルートで買い取ったという。野外に長い期間放置されていたそれらは全機例外なく二十ミリ機関砲を失い、電子機器を全て取り外されてはいたが、現在は

すっかり元通りらしい。
「加えてファンイベントも盛況のようです」
またバリカドイはここ最近、ソ連フロントと米国フロントの境界地帯でファンイベントと称した事実上の機動軍事演習を繰り返している。つまり必要があればいつでも越境できる状態なのだ。
「それともう一点」
「まだあるの？」
「はい」
これはレアも知らないことだったが、バリカドイは鹵獲兵器のデータベースを最近用意したらしい。簡潔に表現すると『どの部隊が、どの兵器の、どの部品を持っているか』を一元管理できるものだ。貴重な兵器をガラクタとして塩漬けにしなくてもいい訳である。戦場（BF）で戦車や装甲車等を鹵獲できても、即時もしくは簡単な整備だけで再使用できるのは少数。どれだけ少なく見積もっても約半数は

大規模な修理が必要だったり、部品取り用として解体しなければいけないことを考えると、これは中々の着眼点だった。

「ひとまず全部隊を警戒態勢に。サブラ、悪いけどアンタも待機に入って」

諸々を鑑みた上でレアはその判断を下す。自分の最も深い場所に潜む、自分を否定する者達の正義や行動を否定することに何よりの快楽を覚える狂気。選択の余地なき状況で生きているうちに消せなくなり、最も大切（サブラ）な者に対する感情とは自分の中で一切矛盾せぬそれに大人しく従ったのだ。

「構いません。何度も申し上げた通り、私は陶器の人形のように扱われたいとは思っておりませんので」

「ありがと。頼んだわよ」

しかしレアは、キャロライン兵団（備兵部隊）やバリカドイが本当に一線を越えてくるとは思っていなかった。その理由は全周を覆う強化コンクリート防壁内のあちこちにヘブライ語で『決して忘れるな！』と記され、上空はソ連製を含む各種機関砲と（ルビコン川を越える）

イラン革命で顧客が消えた死蔵品を各種レーダー等と共に入手したホーク地対空ミサイルで熊蜂宜しくカバー、地上においても、精強な戦車隊及び砲兵隊が敵をいつでも死体に変えられるよう待機している『書類上では米国フロントの非常勤雑用係』[注3]の総本山に殴り込むこと同義だからだ。

「どうせ取り越し苦労で終わるわよ」

レアはそこまで言ってから、軍服を着直すためソファを離れる。

「どうせね……」

しかし床に散らばった衣類を拾い上げる彼女は、心の奥底にある言語化し難い感覚をどうしても払拭できなかった。

注1　イスラエル諜報特務庁。

注2　米国製の携帯式地対空ミサイル。

注3　北京農園の構成員は表向きその形で登録されている。

◆一九八四年一月二十四日

「息抜きができるのよ？　楽しめばいい……」

キャロライン・ダークホームは今日のＢＦ[注1]――ソ連フロントと米国フロントの境界地帯に集められた者達に対し、いつも通りの尊大な口調で言い放つ。

「この戦争はいつまでも続くし、十分過ぎる程辛いものだから」

青い双眸、ポニーテールで纏められた赤い髪。そして身長百七十センチの体をジャージと迷彩ズボンで固めたＧＲＯＭはＳＯ‐76自走砲こと、Ｔ‐55中戦車の車体にＭ18駆逐戦車の砲塔を載せた現地改修車両の上から続ける。

「そんな……！」

「お、俺達に死ねって言うのか……？」

すると刑務所より移送され、強制的な性的禁欲や権力による理不尽極まりない生殺与奪『からは』解放された囚人達は大きく動揺する。

すぐに帰国したがるハンガリー人。
でたらめなイタリア人。
筆舌に尽くし難いルーマニア人。
主にこの三要素で構成されている囚人達。彼らは麻薬取引や強盗殺人といった悪党だけでなく、未成年に対する強姦や過激派崩れ、挙句の果てにはネオナチと悪い意味での玉石混交。
「そうよ。マトローソフになれるチャンスでしょ？」
しかしキャロラインは悪びれない。それどころか彼女は、囚人改め囚人兵達がアルカに運び込まれた後、穴の開いたヘルメットと錆だらけのモシン・ナガン（旧式小銃）を手渡されてなお『肉の壁』として使い潰されるという運命を察していないことが信じられなかった。
「罪を犯し、法に触れたアンタ達はもう人じゃない――生きている肉なの」
キャロライン兵団（傭兵部隊）のボスにしてみれば法的保護の外に置かれたような罪人共の

解放は、取引を確保して維持するための法的・財務的な手段――周囲から見れば白黒はっきりしない、自分達からすれば完全に合法――なのだ。

「だけどね、そんな肉にも少しばかり選択権がある。一つは囮になって私の役に立つこと。もう一つは囮としてマーレブランケもしくは北京農園の弾に当たって死ぬこと。あいつら無差別攻撃が得意だから……」

直後、苦々しい口調で「メフィストフェレス[注2]との契約か！」と吐き捨てたのはゼック……ザクリュチョーンヌイと呼ばれる、反逆罪で起訴された政治犯だった。

「どうかしら？」

一方、赤いリュックサックを背負っている団長（ボス）は彼に微笑む。

「メフィストフェレスの方が遥かに善人かもしれないわよ？」

そして「でも運良く生き延びることができたら、アンタ達がこれからの人生で何をしようと私は許してあげる。どんなことだってね」と付け加えた。要するに『犯罪者は自らの血で罪を抹消できる』と言っているのだ。

〈行け！　自らの血で、その罪を浄化しろ！〉

やがてその声が無線機から聞こえると、囚人兵達はＺＵ‐２３‐２対空機関砲やＺＰＵ‐２対空機関砲を搭載した日本製のピックアップトラック及びＭＴ‐ＬＢ汎用軽装甲牽引車を背に歩き出す。正確には羊宜しく追い立てられたのだが。

「君達はあの機関砲で援護してくれるんだろう？」

ある囚人兵は立ち止まってキャロラインに問う。彼は刑務所に入れられてから長いこと会っていない自分の娘と彼女を思わず重ね合わせてしまった様子だ。

「そんな訳ないでしょ」

だが、問われた側は失笑するのみ。

「アンタ達を援護するためじゃない。あれはアンタ達が勝手に逃げてこないよう見張るためのものよ」

注１　フロント同士が戦闘を行う場所、バトルフィールドの略称。

注2 ゲーテの『ファウスト』に登場する悪魔。

◆

『暇でモテないヴァルキリーズファンの皆さーん！』

どこまでも人を馬鹿にしたようなアナウンスが塹壕内に木霊した直後、マーレブランケの外国人義勇兵[注1]達は「諸君！　やるか！」といきり立った。

『昨年九月に始まった遺恨！　二大勢力の血で血を洗う抗争はまだまだ続く！』

マリア・パステルナークのため全世界から集まったファン[大人達]が各々ＲＰＧ‐７の先端に細長いダイヤモンド型の弾頭を装着したりＭＧ３軽機関銃のチャージングハンドルを引く一方、ニューヨークやロンドン、ベルリン、東京では勝利条件や両軍の戦力データについての放送がグレン＆グレンダ社のネットワークを通じて流される。

敵を全滅させれば勝ち！

今回の勝利及び敗北条件はシンプルなもの。勝者を妬み敗者を笑うことでしか惨めな自分を守れない人々は今頃、どちらかの勢力に『ママからのお小遣い（はした金）』をベットしている筈。

狼の世。まさに羊の皮を被った、狼達の世である。

注1　マーレブランケには特待生という形で多数の大人が参加している。

◆

〈それじゃ頑張ってね！　マイ・マンネ（私の仲間達）！〉

死と苦しみの共犯者となる以外の選択肢が最早残されていない連中――早くも疲れ切って野蛮な表情となっている囚人兵達は、後方で紅茶とクッキーを味わう

キャロラインから前進を命じられる。歩き出す肉の群れ！

「神よ……これを生き延びたら、喜んでお前の尻を舐めてやる……！」

「法や罰……愛国心（パワー）……砂糖（策略）……称賛（給料）……栄光……！」

ただただ縦二メートル、横七十五センチの木製簡易ベッドだけの生活空間から逃げ出したいがために志願した者達は知らない。嫌々歩き出した自分らに対してマーレブランケはスワヒリ語でババ・ムタカティフ（聖父）ことカチューシャロケットやソ連製M46カノン砲の照準を合わせつつあることを……。

〈撃て！〉

間を置かず、マーレブランケのヴァルキリー[注1]達は砲撃開始。撃ってくださいと言わんばかりにゆっくり前進する囚人兵目掛けて、ありとあらゆる口径の火砲が火を噴いたのだ。

「後退！　後退！」

「肉挽き機に突っ込むなんて冗談じゃない！」

第一撃で壊滅的被害を受けた囚人兵達は、錆び付いたモシン・ナガン[旧式小銃]を捨てて文字通り蜘蛛の子を散らすように逃走していく。逃げたら殺されるという事実は真新しいサモワール[注2]を目撃したことで忘却してしまったようだ。

〈最早人間ではない！　躊躇するな！〉

しかしバリカドイの機甲部隊は陣地への撤退を許さなかった。ＭＴ－ＬＢ汎用軽装甲牽引車に搭載されたＺＵ－２３－２対空機関砲が逃げ惑う囚人兵を薙ぎ払うだけでなく、Ｔ－３４中戦車――ヒトデ転輪と蜘蛛の巣転輪が混在し、砲塔後部にＭ２重機関銃が増設されている――や増加装甲付きのＴ－５５中戦車も容赦のない砲撃を開始した。これらの戦闘車両は全て、最近作られたデータベースによって再生させられたキメラ[注3]である。

味方戦車の主砲は敵ではなく自分達を殺すためにあること。

自分達は武器を捨てて投降する臆病者にすらなれないこと。

幸運にもまだ生きている囚人兵はこの二つに気付く。

そして――。

自分達は、損害度外視の突撃をひたすら敢行するしかないことも知った。

注1　アルカにおける娯楽戦争の中心的役割を担う人造人間。マーケティングの都合上全員が十代の美少女の姿をしており、人格も疑似的なものである。

注2　両手両足を失った負傷者を意味する。

注3　ギリシャ神話に登場する怪物。複数の動物が合体した姿をしている。

◆

ソ連フロント方面――バリカドイの陣地では督戦こそ行われているが、本隊が動く気配はまるでない。囚人兵が戻ってこれないよう撃ちまくっているのみ。

「どう？」

キャロラインは、辛くも生き延びた囚人兵達が「さっさと前線に戻って死んでこい！」と傭兵やＧＲＯＭからリンチされる模様を横目で見つつ部下に問う。

「敵陣の位置は把握できました」

「ブラボー！　上出来ね。もう少し鉛筆（囚人兵を死なせたら）を折ったら動くわよ」

今回、キャロラインが囚人兵に求めているのは二つ。マーレブランケ（タスクフォース・リガ）の砲弾を無駄撃ちさせることと、それによって彼らの陣地を見付け出すこと――要するに忌むべき悪魔の軍勢の正統なる後継者が絶対砲撃せざるを得ない状況を意図的に作り上げ、どこにいるか特定でき次第、今は督戦隊（注一）に甘んじている本隊が行動を開始する流れなのだ。

「まるでイランのパスダラン（革命防衛隊）ですな」

その運用法は双眼鏡で前線を検める部下の指摘通り、パスダランことイランの革命防衛隊を彷彿とさせる。この部隊はイラクとの戦争（イラン・イラク戦争）において、一週間程度の簡単な基礎訓練を受けただけで前線に赴いた。そして少年や老人を含む大軍勢は

正規軍の露払いとして損害に構わず前進、フセインの軍隊[注2]を恐怖させたという。
「近代戦をやれる軍隊を短期間で作れたら、誰も苦労しないのよ」
部下の言葉を受けて、キャロラインは紅茶を一啜りしてから苦笑する。現在のバリカドイは、表沙汰にはなっていないがキャロライン兵団（傭兵部隊）の傀儡だ。
『最早軍隊として有効な力はなく、あらゆる面において混乱が見られる』
グレン&グレンダ社の理不尽な支援打ち切りを受けて、こう評価されるまでに弱体化したバリカドイ（傭兵部隊）を再建すべく、昨年十一月……キャロライン兵団は人員を派遣した。同組織は北京農園からの支援も相俟ってマーレブランケの不敗神話をゼーロウ3[注3]で崩壊させたが、代償として壊滅的打撃も被る。
「全く……いざ住んでみたら空き家だったじゃないの」
その結果空洞化した組織にキャロライン達は入り込み、ロイコクロリディウム[注4]宜しく乗っ取った次第だ。全てが合法的かつ円滑に行われた。
「イルジオンのバカ、もう少し使えそうなの残しておきなさいよ」

だがバリカドイには本当に何も残ってはいなかった。戦術原則を完全無視した攻勢を繰り返した結果、元から限界に近付いていた人的資源は払底し、重装備もその大半が失われていたのだ。よってキャロラインは今回――イラン軍の真似をするしかなくなったのである。

注1　許可なき逃亡や後退を図る友軍兵士を撃ち殺す部隊。
注2　イラクの大統領。独裁者として知られる。
注3　マーレブランケの最終防衛拠点。
注4　カタツムリに寄生する吸虫。

◆

「冗談じゃねぇ！　前進できるもんか！」

戦闘開始から一時間が経過した頃、囚人兵達は文字通り八方塞がりの状態まで追い込まれていた。

「突破は不可能！　繰り返す！　突破は不可能！　せめて増援を……！」

正面――米国フロント側からはマーレブランケの猛攻。

背後――ソ連フロント側からは自軍の砲火。

自分達が持っているのは、木の板にテープで無数の爆薬を巻き付けた即席爆破装置と錆だらけのモシン・ナガン（旧式小銃）。これで何をしろと言うのだ！

「うわっ！」

中にはＡＫＭ自動小銃を与えられた囚人兵もいた。しかし、これも例によって整備不良のため、ＧＰ25グレネードランチャーを放つや否や直後本体のカバーが開いてしまう。そして錆付いた金属部品やスプリングが勢い良くぶちまけられた刹那――持ち主も砲弾で四散する。

『七日間生き残れば恩赦が与えられる！』

『名誉回復の手段は牢獄からのチャレンジのみ！』
『困難に立ち向かって、自信を持ち、人から尊敬される一生を送ろう！』
数日前刑務所で勧誘された時、ここにいる誰もがそんな風に言われた。しかしここにいる誰もが、自分達は七時間どころか七分間も生きていられないと自信を持って言えるようになっていた。
〈我に余剰戦力なし。そこで死ね！〉
「だったら死んでやる！　地獄じゃこっちが先輩だからな！」
やがて半ば自暴自棄となった囚人兵の一人が、一旦振り向いてから自軍陣地に罵声を飛ばした。
「地獄で……死ぬまで犯してやるぞ！　サイボーグ女（キャロライン・ダークホーム）！」
彼は言いたいことを言ってから、照準器のないＲＰＧ‐７を担いで走り出す。
自分の得物は発射可能なのか？
発射可能だったとして、着弾時にちゃんと爆発するのか？

その二つの疑問は解けないままだったが……。

◆

興味深いことに、ＢＦの別の場所では偶然が多数重なった結果囚人兵の一団が塹壕への突入に成功していた。

「く、食い物！」

さすれど彼らは血の池地獄で苦しむ味方を援護するようなことはせず、マーレブランケが残した食糧――それも大量の――を見て目の色を変えていた。

「肉があるぞ！　酒もだ！」

悪名高い第三十六ＳＳ武装擲弾兵師団[注1]には到底及ばないが、それでも囚人兵はパンやサラミを構うことなく略奪した。そして口内に押し込んだ諸々をほとんど咀嚼しないで飲み込み、それが喉を通り終える前に別の食い物を噛み千切る。

「……ん？」
その時、一人の囚人兵があることに気付いた。突如世界が揺れ始めたのだ。
「なんだ……？」
振動はどんどん大きくなり、テーブルの上にある皿やコップの水もぶるぶると揺れ始める。更には足元から、ネズミ達が大慌てで逃げ去っていくではないか。
「これは――」
やがてディーゼルエンジンの駆動音が聞こえてくると、従軍経験を持つ一人は何が起きたのかを悟った。
戦車だ！
こ　れ　は　戦　車　だ　！
戦　　車　　が　　来　　る　　の　　だ　　！
大慌てで塹壕を出た囚人兵達は、米国フロントのある西方から見慣れぬ戦車が横隊を作って迫ってくる様子を目撃した。

「見たことのない戦車……T‐70ってやつか……？」

T‐64中戦車。

ソ連本国でも秘密兵器の扱いを受け、NATOとの最前線こと東欧に駐留する精鋭部隊だけが装備し、海外輸出も行われていない代物だが、マーレブランケはビッグ・マザーの特別な計らいによって、一九八一年から配備の始まったB型を多数保有している。要するに同組織の虎の子だ。

「中に戻れ！　早……」

囚人兵達は揃って顔面蒼白となり塹壕に駆け込むが、停止したT‐64中戦車は構うことなく百二十五ミリ滑腔砲を放つ。だから彼らは一人残らず消し飛んだ。

『先頭に立つ愚か者』

ベトナム戦争も佳境を迎えていた一九七二年のイースター攻勢の際、NVA[注2]は戦車部隊に先陣を切らせた。だが開いた場所を堂々と進んだせいで敵から早々に発見され、容赦ない航空攻撃で壊滅――故に、そんな風に呼ばれてしまった。

しかし……。

このＢＦの上空には、劣勢の地上部隊を救うために果敢な対地攻撃を仕掛けるイントルーダー[A-6]なんて一機もいなかった。だからＴ‐64中戦車は負傷した敵兵をプレス加工[踏み潰した]したり、榴弾によって血まみれの胴体や、靴を履いたままの足を多数作り出したりとやりたい放題だ。

ぱきっ。

ぱきっ。

ぱきっ。

やがてＢＦには軽やかな音が響き始めた。何かが破裂するような音が！

それはＴ‐64中戦車の履帯で踏み潰された囚人兵の死体が、圧力に耐え切れず弾け飛ぶ音であった。

注1　囚人で構成された武装親衛隊[SS]の部隊。同組織の面汚しと言われた。

注2　北ベトナム軍の略称。

◆

「オーケストラを奏でて！」（対戦車戦闘用意）

機甲部隊来襲を知らされたキャロライン――いつの間にかフライトユニットを装備している――は指を鳴らす。するとバンパーにドラム缶を取り付け、多数のそれが荷台にも積み込まれている対戦車トラックが走り出した。

「こんなの人殺しだ！　許される訳がない！」

「人道以前の問題だろう！」

泣きながらそれらを運転するのは、僅か七千ルーブル（およそ一万円）という好条件に釣られた大馬鹿者共。正直自殺攻撃（カミカゼ）以外の何物でもないが、ゾンダーコマンド・エルベと同じように激突直前の脱出が一応許されているため特攻ではない！

〈厄介なのが来たぞ。近付けるな！〉
一方、迎え撃つＴ‐64中戦車は百二十五ミリ滑腔砲だけでなく砲塔の司令塔（キューポラ）に装備されているＮＳＶＴ重機関銃も撃ちまくり、瞬時に数台の対戦車トラックを炎上させてしまう。
〈駄目だ！　潰し切れない！〉
だが全車撃破することは叶わず、全速力で距離を詰めた生き残り（対戦車トラック）は立て続けにＴ‐64中戦車と正面衝突。衝撃で車体が大きく持ち上がり、荷台からは燃え盛るドラム缶が転がり落ちた。
「物事を円滑に進めるのは投票（バロット）ではなく弾丸（バレット）なのよ！」
この日初めてキャロラインが直接戦闘を行ったのは、Ｔ‐64中戦車が炎の壁と対戦車トラックの残骸で停止させられた瞬間である。
「カインは他者を殺した最初の人間だった！」
キャロラインは昨年九月二十二日（ダーク・ホーム）同様に旧約聖書を引用しながら急降下すると、

青い輝き(マナ・エネルギー)の中でＴ－64中戦車に取り付く。そして燃え盛る車体から火達磨状態で飛び出したヴァルキリーの首を大鉈――これまた昨年九月二十二日宜(ダークホーム)しく左手に持っている――で跳ね飛ばした。

「そして主から『汝何をなしたるや？』と問われた時、カインは罪を隠すことができなかった！」

切断面から盛大に血飛沫を噴き出す犠牲者(ヴァルキリー)が車内に戻る一方、キャロラインはフライトユニットのスラスターを噴射して別のＴ－64中戦車に迫る。

「大地から叫ぶ、兄弟の声のために！」

キャロラインは砲塔上面に取り付くなり、ハッチから身を乗り出してＮＳＶＴ重機関銃を連射するフィンランド人(外国人義勇兵)の頭を掴んだ。そして彼の喉を無理矢理上に向けさせ、丸出しとなった喉に刃を走らせた。

「テウルギストと比べるまでもないわね」

こうしてキャロラインは、マリア・パステルナークの言う『デスクワーカーも(司令官だって)

フィットネスクラブ（体を動かしたくなるもの）に行くものだろう？』として随伴歩兵もなく突出したマーレブランケの戦車隊を全滅させた。

戦闘機と戦車を人間サイズで両立させた！

そんなＧＲＯＭはアルカという閉鎖空間においてのみ破壊力を発揮する存在で、外の世界――それこそ国家間の戦争や非対称戦争における戦術及び兵器体系から見れば失笑モノと指摘されることもある。だがここはアルカで、この地におけるＧＲＯＭは紛れもない頂点捕食者なのだ。

「どこ行くの？」

さて視界の端に逃げる悪党（囚人兵）を捉えたキャロラインは、彼の背中目掛けて大鉈を投擲した。そして、串刺し刑に処された男が倒れるよりも早く、脱出を図るその仲間達の逃走ルート上に着地。

「肉が肉挽き機から逃げてどうするの？」

キャロラインは怯える囚人兵らの眼前でもう一つの得物たるスパス12散弾銃を

構えると、展開されたストックが右肩に触れるや否やハンドグリップを思い切り前後させる。使用済みのショットシェルを排出した上で、新しいそれを薬室内に装填したのだ！

「やめっ……」

「イヤ」

直後、構うことなく発砲するキャロライン。その唇もまた、昨年九月二十二日（ダークホーム）と全く変わらぬ狂笑で緩んでいた。

製本版に続く